（3） 令和7年度の学校評価

本年度の 重点目標 （評価項目）	①	キャリア教育の推進
	②	安全・安心な学校づくり
	③	授業力・専門性の向上
	④	豊かな心と健やかな体の育成
	⑤	授業・行事の充実
	⑥	センター的機能の充実と理解促進
	⑦	開かれた学校づくり

自己評価

担当	評価項目	目標・具体的方策	評価	結果と課題
幼小学部	⑤	友達や周りの人と協力して活動する態度を養うための指導の内容や在り方を工夫する。	A	・遊びタイムや昼放課など自由遊びを行い、児童同士のかかわりが増えた。 ・校外学習や、出張授業など体験的な活動を行い、他者や社会とかかわる機会となった。 ・全国の盲学校とのオンライン授業の実施が増えた。学校間交流、居住地校交流も取り組んでいる。 ・文化祭では、幼稚部小学部合同で発表した。 ・次年度も継続して、体験的な活動、ICTの活用により、幼児児童が、積極的に友達や周りの人にかかわろうとするような支援の検討を進めていきたい。
中学部	②	教室の環境を整理し、生徒が学びやすく、安心して過ごせる環境を用意する。具体的には、生徒の視覚特性に合わせた視覚補助具や教室の明るさ、動線を確保し、大規模地震に備え書架等の固定や物品の整理を行う。	A	・転倒の恐れのある書架等は固定の状態を確認した。また、棚に置いてある物が地震の揺れで棚から飛散しないように転落防止の処置をした。 ・視覚補助具について必要性を検討し、不用な補助具は回収した。 ・教室の明るさについては特に問題なかった。 ・他の物品については整理されうまく収納されている。 ・不要な物品は廃棄した。 ・今後、安全対策を維持していくことが課題である。
高等部	③	OJTを通して、視覚障害教育の専門性と指導力の向上に取り組む。 他校とのオンライン授業を通して、主体的で対話的な学習の充実を図り、授業改善に努める。	A	・OJTを通して、職員間で教え合い、確認し合いながら点字の考査問題や点字の会議資料の作成等を進めることができた。視覚障害教育の専門性と指導力の向上につながったと思われる。 ・浜松視覚特別支援学校と三重盲学校とオンライン授業を実施することができた。両校間で密に連絡を取り合い、オンライン授業日の日程を調整できた。オンライン授業では、自ら積極的に他校の生徒に話しかける姿が見られた。
総務	⑤	幼児児童生徒の成長や活躍を共有できる文化祭にする。 舞台発表やコーナー企画などについて、幼児児童生徒と教員の思いをくみとって、適切に調整を行う。	A	・幼児児童生徒、教員が円滑に準備できるように、1学期中に大綱を示し、各係のマニュアル等を整備することができた。 ・当日までの準備では、計画から大きな変更や調整を行うことなく円滑に進めることができた。 ・当日も大きなトラブルなく、幼児児童生徒の準備や練習の成果を十分に伝える場を作ることができた。 ・実施後にいただいた意見をできるだけ早く取りまとめ、次回の方向性を決めることが課題である。
教務	③ ⑤	各教科等の授業力の向上を図るとともに、他部と連携してつながりのある一貫した指導を進める。	A	・教科会2（各教科等を合わせた指導など）の回数を増やしたことで、他部の各教科等を合わせた指導などの学習内容や、教育課程について職員間で情報を共有することができた。 ・年2回の授業参観週間を通じて、他教科や他学部の授業を知ることができた。特に2回目は、次年度を見据えて、他学部の最上級生の授業を参観するように働きかけた。

生徒指導	②	本校の実態や社会状況を踏まえて、各避難訓練の実施回数や実施内容を見直し、安全・安心な学校づくりに努める。 研修や各訓練をとおして幼児児童生徒及び教職員の防災意識の向上を図る。 幼児児童生徒の実態に合わせた防犯教室を行う。	A	・防犯面では、警察や市の職員と連携をして幼児児童生徒の実態に応じた体験型の活動を取り入れることができた。 ・防災面では、職員を対象とした「大規模災害発生時のシミュレーション研修」を実施したことで、防災について考える機会となり、防災意識の向上に努めることができた。今後も従来の訓練や活動内容を見直すとともに、より現実的な訓練や活動を計画していきたい。
進路指導	①	各家庭の進路希望やニーズを具体的に把握し、広い視野から適切な進路先の判断ができるための情報提供を行う。	A	・進路に関する情報提供については、昨年度まで学校ブログを中心に発信していたが、ブログ自体を閲覧しない方もいるため、今年度は、すべての家庭に配布する進路情報誌と学校HPを媒体にして発信を行った。進路選択のための情報や将来の生き方における啓発的な内容について、昨年度の2倍の頻度で発行することができた。今後、ブログのニーズがあれば、進路情報誌と併用してリアルタイムな情報の発信をしていきたい。
保健体育	② ④	安全点検で、児童生徒と一緒に実施し、気づきにく危険個所等の発見する。 エコキャップの回収では、社会貢献に意識できるように呼びかけを行い、回収量を増やしていけるようにする。	A	・安全点検では、児童生徒とともに校内を確認することで、教員だけでは気づきにくい点を共有することができた。児童生徒の視点が加わったことで、より丁寧で実効性のある安全確認につながった。 ・エコキャップ回収の取組では、積極的に声かけを行った結果、資源の再利用や社会貢献活動への意識が児童生徒・教職員ともに高まった。今後も社会貢献や環境保全の意識を継続して高められるように、引き続き取組を進めていきたい。
教育情報	③	更改された機器等の利用方法を職員に紹介し、授業に活用できるようにする。 ホームページのCMS化を進める。	A	更改された職員のタブレットについて、AI等の講習を開催し利用の促進を図ることができた。ホームページのCMS化についても、ICT支援員を有効に活用しスムーズに進めていくことができた。
	⑤	読書週間の「声の図書館」では、児童生徒・職員の興味ある書籍を自身で読んで録音して放送するなど、内容を改善し、職員間の理解を深める。	A	・声の図書館では、希望者に録音してもらい放送することができた。そこでは、自信をもって朗読する生徒の姿が見られ、好評であった。
自立活動	②	視覚障害教育の専門性向上に向けた研修の実施回数や内容の精選を行う。 研修以外の場面でも、職員が指導の参考とできる資料の整理・閲覧環境を整える。	B	・外部講師の招へいや研修内容の見直しを行い、専門性向上に向けた研修内容の質を保持しながらも研修の日数の削減を実施した。また、teams上で各種研修資料を保管、閲覧できるようにした。内容の見直しが必要な資料が多く、今後も計画的に進めていきたい。
	④	視覚障害をもった児童生徒が在籍する小中学校のニーズに沿った研修の計画・実施を行う。 参加した担当者だけでなく、研修で得た情報が参加校全体に周知・共有してもらえるような資料の作成や実施方法を検討する。	A	・出席表と併せて参加者の「困っていること」「研修で学びたいこと」などで収集した情報をもとに、研修内容に盛り込む、コーディネーターからの回答時間を設けることで、研修後のアンケートでは、全3回とも参加者全員から「とても参考になった」「参考になった」の評価をいただいた。 ・研修内容を周知・共有していただくよう、研修会に先んじてお願いすることで、ほとんどの学校で「研修内容の周知共有をした」という回答を得ることができた。
理療科	③	第三者評価（灸）の評価基準・項目について検討する。	A	生徒が臨床で必要になる力を客観的に評価できるように評価シートを作成し、教科会で評価基準・項目について教員間で共通理解することができた。 　後期期末考査で作成した評価シートを実際に用いて採点を行い、灸施術における安全面を適切に評価できることが確認できた。
寮務部	④	寄宿舎と学校や保護者とのつながりを意識することで、舎生を包括的に指導できるようにする。	A	・指導員が学級の懇談に同席すること、連絡帳を活用すること等を通して舎生の情報を共有し、指導について指導員、担任、保護者で連携することができた。 ・寄宿舎日誌に、舎生の安全・健康に関する特記事項をより具体的に記入することで状況把握をより確実に周知することができた。 ・来年度も継続して連携を図っていく。

評価	A	十分満足
	B	ほぼ満足
	C	要検討
	D	大幅要検討

学校いじめ基本方針に基づく取組について	児童生徒への生活アンケート（年3回）、教職員への「いじめ防止取組」アンケートにより状況を把握するとともに、気になる回答に対しては担任を中心に迅速に対応した。その結果、学校全体で未然にいじめを防止することができた。委員会においていじめ防止基本方針の見直し、職員研修での周知を徹底した。次年度は自殺防止に関する内容を新たに加えていきたい。

学校関係者評価を実施した主な評価項目	保護者や地域の小中学校、関係諸機関に対し、授業公開日や行事及びホームページを通して素早く、分かりやすい広報、情報発信に努めた。
自己評価結果について	自己評価結果は、ほぼ満足のいく評価である。保護者アンケートや学校関係者評価委員会での評価とほぼ一致している。
今後の改善方策について	地域支援を中心とした取組をより活性化させ、地域の盲学校に対する理解を深められるようにしていく。小中学校だけでなく高等学校との連携強化に努める。
その他(学校関係者評価委員から出された主な意見、要望)	・総代として地域住民に知ってもらいたいことはどんどん流していくようにしたい。回覧板で「盲学校に関わることで知ってもらいたいこと」などあれば流すので教えてほしい。 ・街中で点字ブロックの不具合がある。気付いたら警察に連絡し対応してもらいたい。生徒が歩きやすいようにお願いします。カルタを教材として提供した。今後も教材となるような物は提供していきたい。 ・盲学校は専門性を発揮しアピールしていかないといけない。盲学校、寄宿舎という資源を活用していく仕組みを整えたい。 ・岡盲クエストでは学年をまたいでグループを組んでいることがよい。本校で交流をしている岡盲児童はとても心豊かで、怖じ気づくことなく誰とでも話せている。三島小の児童も交流する中で、障害に対する配慮が自然とできるようになってきた。
学校関係者評価委員会の構成及び評価時期	PTA会長、地区総代、盲人福祉関係者　大学教員、交流校校長 令和8年2月9日